

竹本駒之助 女流義太夫一代記

ずっとお世話になつてゐる先生に「残りの一本もせいぜいあと二年くらいだね」と言わられて、これは大変、今のうちにやつておかなければ、一度と「熊谷」はできないと思つて決めさせていただきました。「熊谷」を語るには腹力が必要ですし、これだけ長い詞もあるので、歯と頬の大切さを身にしみて感じます。なにしろ義太夫を語るときは、普通にお話ししているときの息ではとても足りません。はーとすごい勢いで息を出すので、さし歯などは浮いてしまうくらいです。義太夫は歯が命、といつてもおおげさではありません。

今回は「熊谷陣屋」を語らせていただきます。

昨年の九月、「摶州合邦辻」をさせていただいた後、歯が痛くなつて、残つていた下の二本の歯のうち一本を抜くことになりました。そうしましたら、歯を一本抜いただけなのに、身体半分がなくなつてしまつたかのようになつて、体力も声の力(リキ)も落ちてきてしまつたのです。歯のことで、これほどまで大変なことにはなつたことは、想像もしていませんでした。

【チラシ使用写真】竹本駒之助三十五歳頃



「老い」と向き合うの段 ～3人の名医たち～

上下とも義歯にしたのは十年くらい前のこ
とです。豊竹嶋太夫師匠の紹介で、奈良の水原
恭治（みずはらきょうじ）先生にずっとお世話
になつて いますが、この方が神様みたいに上
手な先生なんです。入れ歯は合わないと痛
かつたり、力チャ力チャしたりするんですが、
この先生は技工士さんがお辞儀するくらい器
用で、ちょうどいいように直してくださるお
かげで、普段は入れ歯のことを感じずにいら
れます。

くて。最終的に日本医科大学付属病院で両目を手術していただきました。左の目は手術した直後は視力が出たのですが、だんだん見えなくなつてしましました。右の目は二度手術して、二度目でよくなりました。

この前先生とお話ししていたら「僕が最初に診たときは十本あつたよ」とおっしゃつていましたので、十年間で少しずつ抜けていつたのだと思います。一本ずつ歯がかけていくたびに、文字の発音が汚くなつていくのが何よりも嫌でした。文字をきれいに発音することを、ずっと心がけてきたのに、自分の身体の都合でそうなつてしまふ。本当に不満で仕方ありませんでした。

その名医に何度も診ていただいて、「せいぜいあと二年」と言われたのですから大変です。とにかく三カ月にいつぱんは来なきいと言わされて、秦野から奈良へ通っています。時間を作るのが大変なのですが、水原先生に診ていたらだかなければ、義太夫ができなくなつてしましますから必死の思いです。

えない。それでも稽古に行つたのですが、だんだん見えなくなつてきてこれはあかんと。先生にお電話したら、担当の日ではなかつたのにも関わらず、すぐいらつしやいと言つてくれださり、スタッフをみんな集めて「この人は人間国宝で、僕が手がけている大切な人です」と説明くださいました。本当にありがたいことです。

歯のほかにも、目が問題でした。どうも私は色々なことが目に来てしまうようで、嫌だなーと思うことがあると、目の調子が悪くなるんです。この前も、上のほうが暗くて見えないなと思うときがあつて、先生のところに行つ

上下とも義歯にしたのは十年くらい前のことで。豊竹嶋太夫師匠の紹介で、奈良の水原

たら、眼圧がものすごく上がっていた、ということがありました。

病気知らずできた私が、身体の衰えを感じるようになつたのは、なんといつても、胃ガンの手術をしたときです。人間国宝の認定を受けた次の年（二〇〇〇年）、六十四歳のときでした。なんの自覚症状もなく、人間ドックでみつかつたのです。

ドックの結果を聞きに行つたのが、一月三日、四日あたり。その場で「胃ガン」と言わされました。主人に「騙されてるんじゃないか」なんて言われたくらい、それほどなんともなかつたんです。

先生に「すぐ手術しなければならない」と言わされましたので、すぐにはとてもできないと仕事のことを説明したのですが、先生は「僕たちが全面的に面倒をみますから」とおっしゃつて、チームを組んで手術の段取りをすべて決めてくださいました。手術はたしか一月末か二月初めだつたと思います。

そのとき診てくださつたのが東海大学医学部付属病院の幕内博康（まくうちひろやす）先生で、先生自ら執刀くださいました。胃の三分の二を切除しましたから、結構な手術ですね。入院は二〇日ほどで、その前後を含めて舞台をお休みして、代わりの方をお願いすることになつたのが、とても心苦しかつたです。

十年くらいは定期的に検査に通つていきましたが、おかげさまで胃はよくなつて、その後はなんともありません。先生からは、お腹に力が入らないといけないので、たくさん食べなさいと言われました。胃を切つた当初はそうそう食べられないのです。少しずつ何度も分けていただきましたが、胃を切つた当初はそうそう食べられました。

ろが痛くて力を入れるのが大変でした。以前より腹力も落ちてしまつました。とにかく稽古を積んでいくしかありません。

こうやつて名医の先生方に親身に支えていただいているおかげで、なんとか続けさせていただいています。年をとるということは、なんにもプラスになりますんね。だんだん体力が落ちてきてしましますから、落とさないよう、いかに現状を保つかで精一杯です。しかも、いい見本になつてくださつていた師匠はみな亡くなつてしまつました。言われたことを思い出したり、テープで聴かせていただいたりして、勉強させていただいています。

「熊谷陣屋」は、若太夫師匠の十八番（おはこ）でした。直接お稽古していただいたわけではありませんが、ずっとお伴していましたから、耳にタコができるくらい聴かせていただきました。お稽古は越路太夫師匠にしていただきました。越路太夫師匠は「若太夫師匠のいいところは、いただいていいんだよ。僕もそうしている。これはいいなと思うところを盗もうと思って、どういう息の仕方をしているか注意して聴かせていただいた」とおつしやつてくださいました。若太夫師匠、越路太夫師匠とでは、人物の表し方や、ご自分の思いをどこに持つていくか、ポイントが違います。基本的には越路太夫師匠に教わったように語らせていただきますが、自然と若太夫師匠に言われたことが出ることもあります。

「熊谷」はなんといつても男の人の出し物ですね。本来なら、女性の私ができるもんではないのですが、無理を承知で、命をかけて、今やらせていた

だきたいと。死んでもいいくらいの厳しい気持ちでさせていただきます。

熊谷の気持ち、妻・相模の気持ち、今でこそわかるものがあると思つています。熊谷を訪ねた相模は、（子どもの身の上）なにかあつたのでは……と勘づいていたのではないか。熊谷が「なにしに来た」と問うたとき相模はそれを悟らなければいけなかつたのではないか——。考え始めると切りがります。

越路太夫師匠はお稽古に行くたびに「いくつになつた？」とお尋ねになりました。今から思うと、きちんとやつてはいるけれど、まだ心情が届いてないなと思つていらしたんだろうと思ひます。今、師匠の前で語らせていただいたら、言われないでも済むかなあと思つたりします。

年をとるのはマイナスばかりと思つていていましたが、そう思うと、ちょっととはいあるのかもしひれませんね。



【写真】二〇一七年三月公演のチラシ